

エリザベスについての一考察

——ジェイン・オースティンの知性——

上 村 和 也

ま え お き

芸術・文学作品は一つの驚異である。芸術・文学作品の中にはすべてのものが存在している。物や事あるいは人に対する気持や好み、作品のいわゆる *medium* としての言語を通じて表現され、作品の中に存在している。思想や見解が作品の中の幾多の人物を通じてあからさまに述べられ、また隠約のうちに露呈される。作品の中には、そのような明暗ともごもの思想と見解が存在している。作品の中には、また感情と倫理が存在する。それらは、作品の中の人物の行為・言動のうちに脈うち、その中を流れていると同時に作品全体に微妙に浸透する。我々は作品の中で風俗・習慣を知り、生活を体験する。我々はそこに友人を発見する。作品には歴史と人生とがある。いや作品は歴史と人生そのものである。……

しかし、これらのすべてのものは作品の中に個別の特質・事物として、それぞれ無関連に存在しているのではない。それらは分離した恣意的存在ではなく、部分の意義ある結合としての全体なのである。故にある意図された目的を達成すべく、部分が *authentic* な権威の下に、自己の自由を失なうこと無く、全体に寄与しているという複雑な作品構造の中からある一つの部分を取り出すということは危険な作業といえよう。批評家・研究者の運命は、この構造全体の上に依存・存在する作品の鑑賞という審美的降服 (*esthetic surrender*) の持ついわば絶対的権威から離れ、審美的降服にともなって起こる分析と総合という理性の冒険の行程を踏むことによって、その絶対的権威を相対化することにある。そして批評家・研究者の仕事は、この両者の間の往復の連続・継続であるといえる。

すると我々はもう一度初めに帰って、文学作品の中にはすべてがあるといったのに対して次のように附加して言うことができよう。

実は、芸術・文学作品の中には、「気持」も「好み」も、「思想」「見解」「感情」「倫理」も、そして、また、「習慣」も「生活」，「歴史」も「人生」も存在しない。存在しているのは、読む行為にともなう楽しみ、「純粋な慰み」 (*pure entertainment*) ¹⁾ をもたらすものだけである、と。

1) Maugham, W. Sommerset, *Ten Novels and Their Authors* (London, Heineman, 1954), p.57.

すべてが存在していて、しかも何にも存在しないという不可解・苛立ちに耐え、そして、この矛盾の生み出す澁刺とした感受性と、矛盾解決の情熱と、それに裏打ちされた分析への志向を涵養することに、その不可解・苛立ちのはけ口・活路を見い出すことこそ第一義的なことである。そして、いわばその結果としての分析そのもの、批評・研究は第二義的といわねばならない。しかし、この「第二義的」とは無論重要でないという意味ではない。後者は前者の「開花」として意味があるということである。あるものの「開花」としてではなく、単に「花」そのものとして批評が絶対化・教条化されると、批評家は芸術に群がるはえの如きものにされたり、叡知の始まるところに芸術は終るのだというようなことが高唱されたりすることになる。そういう意味からも芸術・文学は一つの驚異であるという知覚・認識から、文芸批評・研究はまず出発する必要があるだろう。そして、それはまた芸術・文学作品は一つの驚異であるということにたぶん終ることになるだろう。

1

本論考の目的は、『高慢と偏見』(*Pride and Prejudice*)の主人公エリザベス(Elizabeth)の性格の1側面——知的側面——を取り上げ、その側面を強調・重要視すると同時にそれがどのような性質のものであるかを感性(感情)とかかわらせつつ、作品『高慢と偏見』の中に探ろうとするものである。ただ、その際、ジェイン・オースティン(Jane Austen)自身に問題をかかわらせ、作家に関して、自由に想像(文字通りの想像である)を働かせるということを受けなかった。そうすることが私の論旨をより鮮明に浮彫り出来ると思うからである。それがはたしてドグマチックな付会に陥っていないかはひとえに第三者の判断に委ねるほかはない。

2

『高慢と偏見』の第5章の終りにかけて、ダーシー(Darcy)の不遜な態度のことを中心に、前夜の舞踊会についてルーカス(Lucas)家とベネット(Bennet)家の人々とがいろいろ話し合っているところに次のような箇所がある。

‘Miss Bingley told me’, said Jane, ‘that he never speaks much unless among his intimate acquaintance. With *them* he is remarkably agreeable.’

‘I do not believe a word of it, my dear. If he had been so very agreeable he would have talked to Mrs. Long. But I can guess how it was; every body says that he is ate up with pride, and I dare say he had heard somehow that Mrs. Long does not keep a carriage, and had come to the ball in a hack chaise.’

‘I do not mind his not talking to Mrs. Long,’ said Miss Lucas, ‘but I wish he had danced with Eliza.’

‘Another time, Lizzy,’ said her mother, ‘I would not dance with *him*, if I were you.’

‘I believe, Ma’am, I may safely promise you *never* to dance with him.’

‘His pride,’ said Miss Lucas, ‘does not offend *me* so much as pride often does, because there is an excuse for it. One cannot wonder that so very fine a young man, with family, fortune, every thing in his favour, should think highly of himself. If I may so express it, he has a *right* to be proud.’

‘That is very true,’ replied Elizabeth, ‘and I could easily forgive *his* pride, if he had not mortified *mine*.’

‘Pride’ observed Mary, who piqued herself upon the solidity of her reflections, ‘is a very common failing I believe. By all that I have ever read, I am convinced that it is very common indeed, that human nature is particularly prone to it, and that there are very few of us who do not cherish a feeling of self-complacency on the score of some quality or other, real or imaginary. Vanity and pride are different things, though the words are often used synonymously. A person may be proud without being vain. Pride relates more to our opinion of ourselves, vanity to what we would have others think of us.’¹⁾

話しの発端はリジー (Lizzy) が舞踊会で、ダーシーに踊りの相手にされず、さらにそればかりか、「まあかなりの女だが、私の心を誘うほどの容姿でもない。それにいま、ほかの男たちから問題にされない若い女に箔をつけてやる気持などさらにはない。」と言われたことに始まり、リジーを含めてシャーロット (Charlotte)、ベネット婦人 (Mrs. Bennet)、メアリー (Mary) 等がそれぞれ自分の意見をいっているのがこの箇所である。いまここで問題としたいのはエリザベス (リジー) のことばを取らえて分析・考察するのではなく、このルーカスとベネットの両家族の間で見られる日常生活の一端をここに見ようとするものである。つまりこの会話全体のあり方にオースティンの知性の一端を見、ひいてはこの作品の中の知的要素の典型としての一般的特色・雰囲気を見ようとするものである。だから特に小娘のメアリーが *pride* (高慢) について「見栄と自惚とは別物よ、よく同じように使われるけれどもね。自惚れていても見栄をはっているとはいえないわ。自惚れは自分自身をどう思うかということに関係することで、見栄は自分が他人にどう思われたいかに関係するのよ。」

(Vanity and pride are different things, though the words are often used syno-

1) *Pride and Prejudice* (The World's Classics), pp.16—7.

nimously. A person may be proud without being vain. Pride relates more to our opinion of ourselves, vanity to what we would have others think of us.) とひとかどの理にかなったことを述べていることや、またシャーロットがダーシーは「自惚れる権利がある」(……has a *right* to be proud)といている所などに注意しておきたいのである。「なお、エリザベスは、この場面で「彼 (Darcy) が私の *pride* を傷つけなかったのなら、あの人の *pride* は容易に許せるでしょうが」(……and I could easily forgive *his* pride, if he had not mortified *mine*) といている。エリザベスはもともと理性的な女性で冷静なことが言えるのであるが、この際自分の *pride* が傷つけられる……ということしか言えず、「自惚れる権利がある」というような自己の感情に動揺されないことばを吐くことが出来なかったことが、やがて「偏見」(*prejudice*) を克服して「今のこの時まで自分自身を知らなかった」(*Till this moment, I never knew myself*)¹⁾ と言うに至る起因になるのである。なおこの点は後でまたふれる。」とにかくこのような知的な会話が日常の友人・親子・隣人等の間でおこなわれていること、それが文字通り家常茶飯事になっているということに注目しておきたい。それは以下のような箇所になると一層顕著であって会話・話しというよりはむしろ論議そのもののような印象さえ与えるのである。

‘The power of doing any thing with quickness is always much prized by the possessor, and often without any attention to the imperfection of the performance. when you (Bingley) told Mrs. Bennet this morning that if you ever resolved on quitting Netherfield you should be gone in five minutes, you meant it to be a sort of a panegyric, of compliment to yourself—and yet what is there so very laudable in a precipitance which must leave very necessary business undone, and can be of no real advantage to yourself or any one else?’

.....

‘. . . but I (Darcy) am by no means convinced that you would be gone with such celerity. Your conduct would be quite as dependent on chance as that of any man I know; and if, as you were mounting your horse, a friend were to say, “Bingley, you had better stay till next week”, you would probably do it, you would probably not go—and, at another word, might stay a month.’

.....

‘. . . ; for he (Darcy) would certainly think the better of me, if under such a circumstance I (Bingley) were to give a flat denial, and ride off as

1) *Ibid.*, p.201.

fast as I could.'

'Would Mr. Darcy then consider the rashness of your original intention as atoned for by your obstinacy in adhering to it?'

.....

'Allowing the case, however, to stand accordingly to your representation, you must remember, Miss Bennet, that the friend who is supposed to desire his return to the house, and the delay of his plan, has merely desired it, asked it without offering one argument in favour of its propriety.'

'To yield readily—easily—to the *persuasion* of a friend is no merit with you.'

'To yield without conviction is no compliment to the understanding of either.'

'You appear to me, Mr. Darcy, to allow nothing for the influence of friendship and affection. A regard for the requester would often make one readily yield to a request, without waiting for arguments to reason one into it. I am not particularly speaking of such a case as you have supposed about Mr. Bingley. We may as well wait perhaps, till the circumstance occurs, before we discuss the discretion of his behaviour thereupon. But in general and ordinary cases between friend and friend, where one of them is desired by the other to change a resolution of no very great moment, should you think ill of that person for complying with the desire, without waiting to be argued into it?'

'Will it not be advisable, before we proceed on this subject, to arrange with rather more precision the degree of importance which is to appertain to this request, as well as the degree of intimacy subsisting between the parties?'

.....

このように、物事・行動におけるじん速ということの可否・当否が、ダーシーの手紙の書き方から、ビングリーのネザフィールド (Netherfield) の転出のことに発展して述べられている。それは簡単に箇条書にすれば以下の如くなるだろう。(実は、簡単に箇条書きするのは困難である。それに箇条的に書くと、会話の生きたことばの陰影が消えるからであるが、いまは会話の内容というより内容の構造に焦点をあてるのが目的であるから、敢えて以下の分析を試みる。なお〔 〕内は発言者の名前である。)

1. ダーシーの手紙の書き方は念が入っていることについて。

1) *Ibid.*, pp. 45—7.

イ 長所として

- (1) 手紙のことばの選択に意を払うこと（ダーシーは4つの音節の単語を考え出すのに苦心する。）〔ビングリー (Bingley) 〕

2. ビングリーの手紙の書き方はダーシーと異なること。

イ 長所として

- (1) 思想の流れが早くて表現がついてゆけないので、相手には何んのことが書いてあるのかわからないこと〔ビングリー〕。

（エリザベスはこのことばをビングリーの謙遜の言ととるのに対し、ダーシーは婉曲な自慢ととる。したがって次の「ロ」の言となる。）

- (2) 思想の流れが早いこと。〔ダーシー〕

（ダーシーはここで何ごとであれ、早いということは貴重なことだという一般論を述べる。それが「3」へと話柄をつなぐ。）

ロ 短所として

- (1) 手紙の書く手際のまずいこと。〔ダーシー〕

3. ビングリーがネザフィールドを出てゆく決心をするのに5分もかからないということについて。

意見(1) そんなことはない。必要なことをせずただ急いでみても本人にとっても他人にとってもいい結果はもたらさない。また、ビングリーも他の人と同じようにそんな場合、友人からもう一週間居たらなどいわれると行かないでとどまることになる。〔ダーシー〕

（ここでそんな場合友人のことばを聞き入れるのがいい事か、聞き入れないで自分の意思通りに実行するのがいい事かが議論される。そこで「4」となる。）

4. 友人の希望について。

意見(1) 友人の希望が単なる希望でその希望の根拠となるしかるべき理屈がないのにそれに屈するのはよくない。〔ダーシー〕

意見(2) 友情や友人への尊敬の気持があればいわゆる理性的に説得されることがなくてもその希望、要求に屈することもしばしばありそれは特別悪いことではない。〔エリザベス〕

意見(3) 友人というがどの程度の親密さを持った友人であるか、またその希望、要求がどの程度の重要性をもったものであるかを決める必要がある。〔ダーシー〕

以下ビングリーが、自分は議論は争いだからいやだということで、この件は終りになるのだが、とにかくこの会話に見られる、日常の細かなことに対して、時と場合、状況のきめ細かな分析をやって事態を解決しようとする心的態度、理性にすべてを訴えてそこから問題を解決しようとする執拗なまでの態度等に注意を払いたいのである。（しかもこの議論はこの

作品全体から見ても決して、浮いたものではなく、人物の性格の描写に参与しているのみならず、物語の発展にも微妙に巧みに関係しているのである。) こういうことが、いとも簡単に、何の苦もなく家庭の居間でおこなわれるという精神的風土、またこういう場面・会話を設定するオースティンのペンの働きと理性に驚くのである。実際、問題が友と友の間の友情がどの程度のものなのかということ、また友の希望・頼みがどの程度の重要性をもつものであるかということまで論じてまわるとそれは私に有無を言わせない種類の言となるのである。例のイギリス的 *common sense* などは、この人間の問題、人と人との間に起こるあらゆる問題を、日常かくまで長・短所の両面を論じつくし判断を下してゆくという態度の積み重ねから生まれるのだと思わせてしまうのである。勿論エリザベスの知性はこの基盤とふん囲気の中で生まれてくるものである。

3

次にエリザベス自身のことに論を進めよう。エリザベスの人格・性格を特徴的に示している箇所を挙げたいと思うが、それには先ず、エリザベス自身の言っていること自体が何んといっても重要である。以下エリザベスのことばを中心に論を進めよう。

1. Do not consider me now as an elegant female intending to plague you, but as a rational creature speaking the truth from her heart.¹⁾
2. How despicably have I acted! she cried. — I, who have prided myself on my discernment! — I, who have valued myself on my abilities! who have disdained the generous candour of my sister, and gratified my vanity, in useless or blameable distrust.—

.....

Pleased with the preference of one, and offended by the neglect of the other, on the very beginning of our acquaintance, I have courted prepossession and ignorance, and driven reason away, where either were concerned. Till this moment, I never knew myself.²⁾

1 はコリンズ (Mr. Collins) がエリザベスに求婚した時、エリザベスの断りを相手がなかなか本気にしないので、少し業腹気味に繰返して断わりをいっているところである。だから「ほんとの事をいっている理性的な者」というのは文字通りそうなのであり、求婚された時、一般に女性を示す勿体振った態度をとらないことが「理性的」(rational) だといっているのである。エリザベスのこの理性的な傾向は 2 においてさらにはっきりした形で表わ

1) *Ibid.*, p.107.

2) *Ibid.*, p.201.

されているといえる。エリザベスが、「無知と偏見のため理性も失っていた」と悔むことができるのは取りも直さずエリザベスが理性的であろうとしていることであり、また理性を取りもどすと同時にダーシーと結ばれる道が開かれてくることになる。(なお、エリザベスがここで理性を失っていたことを自覚することで、彼女の側の問題は解決されたと見てもよく、後はダーシーの側の問題へと転化してゆく、そして両者の間の解決が同時にこの作品の解決でもある。)

3. But Elisabeth was not formed for ill-humour; and though every prospect of her own was destroyed for the evening, it could not dwell long on her spirits; ¹⁾

.....

4. It was not in her nature, however, to increase her vexations, by dwelling on them. she was confident of having performed her duty, and to fret over unavoidable evils, or augment them by anxiety, was no part of her disposition. ²⁾

3, 4 からエリザベスが、自分の思い通りにならないことや、不愉快な目にあっても、いつまでもそのことで不機嫌で、渋面ばかり作っているような性格でないことがよく分かる。人間は実存的に不確かな存在にもかかわらず、あすにはきょうと異ったことがありえるという感覚、苦や悪をいつまでも考える (dwell on) ことは、考えるということだけでなく、苦や悪を募らせるものだという自覚、またそれにともなう不安の嫌悪、きょうを考えることなくあすは考えない態度、あす以後はあすを待って考えるのが健全だという認識 (これは、単に暖気だというような精神的怠惰を imply するようなものではない。柔軟なパースペクティブをもった判断をたすけるものである) 等をその特質としてあげうるであろう。そしてこの現実にふりまわされない、感情に流されず常に高所に立って判断しようとする態度こそ……もっともエリザベスが感情に流されたりしないとか、常に高所に立って判断を下しているといっているのではない。実際ダーシーのことばに感情的になったり、ウィカム (Wickham) とキング嬢 (Miss King) との結婚の噂についてガーディナー婦人 (Mrs. Gardiner) と話すところなどではエリザベスは日頃の冷静さを失うのである。そしてそのようなことがエリザベスに 変化を与え作品に 発展を与えるのであるが……エリザベスの 'wit' ³⁾ を生む精神的基盤であり、wit に富む才気煥発がエリザベスの 'vivacity' ということであろう。彼女が笑いを愛するという時、彼女は wit を常に前提としているのである。

1) *Ibid.*, p.87.

2) *Ibid.*, p.224.

3) エリザベスの特質として、"wit" と "vivacity" ということが言われる。実際 "wit and vivacity" という形で作品の中に 2 回出てくる (p.85. と p.104.). エリザベスの性格を端的に述べると、まず "wit and vivacity" というということになるのである。

それは以下のことばがはっきり示している。

5. ‘…… It is such a spur to one’s genius, such an opening for wit to have a dislike of that kind. One may be continually abusive without saying any thing just; *‘but one cannot be always laughing at a man without now and then stumbling on something witty’* ¹⁾ (イタリック・筆者)

このように、人の言動を批判する時、善悪の判断を下すことを避けることはしないが、それを直下にむきだしに述べることはしないという態度（これはあくまで一般的にそうであるというのであり、エリザベスはこれという時は自分の意見、意志は正直に臆せずいえる人物である。例えばダーシーの求愛を拒絶するところ。第34章）がエリザベスにまた ‘playful’ というエピセツトを与えることにもなる。

6. She told the story however with great spirit among her friends; for she had a lively, playful disposition, which delighted in any thing ridiculous.²⁾

7. ………; and in spite of his asserting that her manners were not those of the fashionable world, he was caught by their easy playfulness.³⁾

ダーシーがエリザベスに魅力を感じたのがこの ‘playfulness’ のためであるが、この playfulness を他のことばを借りれば ‘a mixture of sweetness and archness in her manner which made it difficult for her to *affront* anybody.’⁴⁾ ということになる。

以上エリザベスの特質として理性的であること、あるいは理性的たらんとしていることと、 wit (才気) と laugh (笑い) を愛することと、そのいわば外から見た側面としての playful (茶目気のある) な態度とをあげたのであるが、今これを「理性的」ということとその「理性的」を生む気質としての笑うことが出来る、余ゆうのある ‘easy’ な感情状態の2つに分けておこうと思う。つまりいかに理性的たらんとしても、実際問題として情緒が不安定で、感情が動きやすい気質だと、根底から理性的たりえないことになる。エリザベスはそういう意味で、一般的には理性的たり得る情緒が備っていたということなのである。それが wit であり playfulness であり、laugh であったりしているが、このそれぞれの詳しい概念規定などをここでしようとするのではない。ただそれらが一様に気質の問題としてあることを——理性が精神の問題としてあるように——いっておきたいのである。

ところで、それではエリザベスの性格を特徴づけるものとして「理性的」であること、

1) *Ibid.*, p.53.

2) *Ibid.*, p. 9.

3) *Ibid.*, p.20.

4) *Ibid.*, p.48.

easy で快活な性質であることだけで十分であるかという、それはけっしてそうではなくそれだけでは十分でないのである。

4

『高慢と偏見』を注意して読めば、「理性的」ということばで表現しうるような概念・意味内容が、多く見られると同時にそれと対立的・対蹠的な形をとって、感情・気持というものが考えられているように思われてくる。前者は後者を意識し、後者は前者を無視出来ないといった、対抗関係が緊張を生みつつ進行するのであるが、それは個々の小さな場面の中でも見られると同時に作品全体の主題にもかかわってくるもののように思われる。

1. ……… ; your *feelings*, I know, will bestow it unwillingly, but I demand it of your *justice* ¹⁾ (イタリック・筆者, 以下の引用同じ。)
2. His sense of her inferiority——of its being a degradation——of the family obstacles which *judgment* had always opposed to *inclination*, ………²⁾
3. ………and *affection and intelligence*, which might supply it among themselves if there were disappointments abroad ³⁾
4. However little known the *feelings or views* of such a man maybe on his first entering a neighbourhood, ………⁴⁾
5. ………, but she could not have supposed it possible that when called into action, she would have sacrificed every better *feeling* to worldly *advantage*⁵⁾
6. ; and in spite of his being a lover, Elizabeth really believed all his expectations of felicity, to be *rationally founded*, because they had for basis the excellent understanding, and super-excellent *disposition* of Jane, ………⁶⁾
7. these bitter accusations might have been suppressed, had I with greater policy concealed my struggles, and flattered you into the belief of my being impelled by *unqualified, unalloyed inclination*, by *reason* by *reflection* by everything. ⁷⁾

以上の例の中で「1」などは *feelings* と *justice* がはっきりと別の働きであることが明確な前提となっているのであり、「理性」と「感情」の対立の典型的なものといってよ

1) *Ibid.*, p.189.

2) *Ibid.*, p.183.

3) *Ibid.*, p.232.

4) *Ibid.*, p. 1.

5) *Ibid.*, p.124.

6) *Ibid.*, p.336.

7) *Ibid.*, p.186.

い。「2」の場合も‘opposed to’であるというのだし、「5」の場合も同じような事が言える所から、やはりこの場合の分かりやすい例となろう。上にあげたその他の例も語彙こそ異なれ、この例としてあげておきたい。views（見解）も理性のものであり、‘worldly advantage’も理性によってのみ把握出来るものであるのでやはりそれらが‘feeling’と並べられると、一層この両者の関係が特別のものであることが感得されてくるのである。

ところで、このように理性と感情の働きとしての明確な相違の意識があるのであるが、その両者の関係は常に対蹠的なものであったのではなく、事實はむしろコロラリーな関係を作り出すことがオースティンの真の目的であった。したがってここで改めて先き論じた「理性的」たることがややもすればオースティン（あるいはエリザベスというも可）のすべてであるかの如く評されがちであるのに対して、「感覚的」「感性的」たることまたその価値に対してもオースティンは決して盲目ではなかったことを強調しておかなければならない。例えばエリザベスがダーシーの求愛をうけいれ、2人が幸福な気持でいる場面で、エリザベスは、自分の家族のものたちがダーシーをもともと嫌悪しているのでどう思うだろうか、またどう説得させたものかと心配している所に、「エリザベスは、動揺し困惑していたが、自分が幸福だと感じるよりもむしろ幸福であることを知っていた。」(Elizabeth, agitated and confused, rather *knew* that she was happy, than *felt* herself to be so;……¹⁾という記述がある。ここでは勿論エリザベスは、幸福だと知るよりはむしろそう素直に感じたいのであるが、だからといってこの場合これを単純に一般化して先きの「理性」と「感情」との関係にすぐに結びつけようとは思わないが、エリザベスの気持の問題としてではなく、この作品を書いたオースティンの創造精神の問題として考えるとき、いま問題としてきた理性・感情両者のお互いに対する特別な関係の一つの表現と見ることも可能に思えてくるのである。

5

ところで、『高慢と偏見』の中で、人物が初めて登上した時には、次のような表現をとることがきわめて多い。

1. He was quite young, wonderfully handsome, extremely agreeable, and……²⁾
2. Mr. Bingley was good looking and gentlemanlike; he had a pleasant countenance, and easy, unaffected manners. His sisters were fine women, with an air of decided fashion. His brother-in-law, Mr. Hurst, merely looked the gentleman; but his friend Mr. Darcy soon drew the attention of the room by his fine, tall person, handsome features, noble mien;……¹⁾

1) *Ibid.*, p. 360.

2) *Ibid.*, p. 6.

3. But there is one of her sisters sitting down just behind you, who is very pretty, and I dare say, very agreeable²⁾
4. The officers of the——shire were in general a very creditable, gentleman-like set, and………; but Mr.Wickham was as far beyond them all in person, countenance, air, and walk, as………³⁾
5. Colonel Fitzwilliam who led the way, was about thirty, not handsome, but in person and address most truly the gentleman………⁴⁾

人物が初めて紹介される時、必ずといっていいほどその人物が見た目にどう映ずるかが問題とされる。そしてその人物の態度・物腰・容貌が‘agreeable’とか‘pleasing’とか‘conciliatory’とか‘aimable’‘pleasant’とか又‘disagreeable’とか‘disgusting’‘unpleasant’等々の形容詞を使って表現されている。これはオースティンのきわめて特徴的なことであるが、よくみるとこれは、人間関係の深淺、性別に関係なく、人を評する場合まず‘agreeable’か‘disagreeable’かどちらかに極めて言わなければならないといったものなのである。だから当然それは、初対面の人を評する場合だけのことではない。十分相手の気質・才能・長所・短所等を知った人、かなりの面識のある人にも使われるのである。これを先きの理性と感情の問題の観点から言えば、感情の1側面を表わすものといえるであろう。まず感覚で人物をとらえ感情に照らして人物を総合的に——理性が「分析的に」であるのに対して——評価するとでも言おうか。だからエリザベスにとっては人が才能があり、財産があり、家柄がよいとしても、それだけでは結婚の相手としては十分ではないのである。容貌・態度を含めて全体として、‘pleasing’‘agreeable’であり、感覚的にも満足を与えるものでなくてはならないのである。実にエリザベスにとっては、「憎悪する決心をしていた人が、感じのいい人だということになる。」(To find a man agreeable whom one is determined to hate! ⁵⁾)ということが起こったのである。感覚・感情の問題からのみ言えば、disagreeable と思っていた人が、agreeable であることを書いたのが『高慢と偏見』ということがいえる。エリザベスは、確かに才気のある 理性的な女性であり、ダーシーを理解し、ダーシーのすべてを納得するに至るまでは、理性的に思考・行動する。そしてそうすることで感情の解決もつけるのであるが、とにかく最終的にはダーシーを、最初に会った時と同じような態度で agreeable, pleasing と感じなければ結婚は出来ない。⁶⁾ このようにエリ

1) *Ibid.*, p. 7.

2) *Ibid.*, p. 9.

3) *Ibid.*, p. 72.

4) *Ibid.*, p. 165.

5) *Ibid.*, p. 87.

6) この点で、エリザベスとシャーロットの相違がはっきり出てくる。シャーロットは、コリンズについて「頭のいい」人でもなければ、感じのいい人でもない (*neither sensible nor agreeable*) が結婚してもよいという意味のことを言う。そして実際にコリンズ (Collins) と特別な愛情もなく結婚する。(第22章)。しかしエリザベスは “agreeable” でなくとも結婚するというようなことは決して言わないのである。

ザベス（オースティン）は理性をあくまでも尊重し，しかも感情の力をも自覚し，両者の関係に特別な注意を払っていた。

ある評家（Dorothy Van Ghent）は「オースティンの小説においては，道徳的生活は感情的理性（emotional intelligence）と同一だ。」¹⁾ ということをしている。また，十八世紀という時代を特徴づける概念の一つであった「人為と自然」（art and nature）ということに関係させてオースティンは art と nature の中庸（mean）がよいことだと思っていたという人（Samuel Kliger）もあり，「真の趣味を有する人は普通健全な道徳感覚を持つ人だ」（a man of real taste is usually a man of sound moral judgment）²⁾ というのが十八世紀の通念だったとか，個人と社会の相克・調和がエリザベスとダーシーの関係であるとか，当時の社会に勃興しつつあった middle class（中産階級）の aristocracy（貴族社会）に対す挑戦がエリザベスに参るダーシーの姿に表わされているとか³⁾，オースティンがロマンチックな小説家でなかったのは，オースティンが感情の力を知らなかったのではなく，それは制御さるべきものであり，それを表現するにあたっては知的であるべきだと信じていたためだとか，また「経済的決定」（economic determination）ということを指摘する評家（Leonard Woolf）もある。これらの評語はそれぞれオースティンの特質の要素をいいあてているのであるが，私はこれらのよってきたる第一原因を「理性」と「感情」のコロラリーな関係，両者のバランス（balance）を理想的なものと考えていたことに帰したいのである。そしてまずこの「理性」と「感情」の関係を設定した上でこの「理性」の構造と要素に時代的限定を附与して考察しなければならないと考える。「経済的決定」などはその好箇の例になるであろう。『高慢と偏見』に関して言えば，身分，階級（rank）にまずエリザベスの知性がどう反応しているかは明らかに時代の制約をうけている。また『高慢』は「経済的決定」の上に存在するものであり，それを納得するのは知性に俟つほかはないのであり，実際エリザベスは理性的にはダーシーの高慢をうけいれるのである。ただ彼女は「虚栄」（vanity）から感情的にその高慢をうけいれることが出来ないで，それが偏見を生む。だからこの感情をその偏見とともにいかに理性的に解決するかがこの小説の主題であり，その意味では『高慢と偏見』よりも『高慢と虚栄』というのがより適切であろう。しかしいずれにしても理性と感情の関係は，この『高慢』に理性をあて『偏見』にエリザベスの感情をあてることが出来る。感情と理性のバランスの解決がエリザベスとダーシーの結婚に

1) Twentieth Century Interpretations of Pride and Prejudice, p.26.

2) Ibid., p.64.

3) Ibid., p.7.

呼応しているといえよう。

私の好きな英語の単語の一つに *sentiment* というのがある。感情と訳しても意見と訳しても実際そういう辞書的意味はあるにしても、*sentiment* の持つ独自の知性と感情を融合した心というものを伝えはしない。日本語の広範な意味内容を持つ「心」ということばをあてるほかやはり仕方がないようである。¹⁾ オースティンの文学はこの *sentiment* に彼女の限定された生活の事・物を触れさせて agreeable なもの pleasing なものを探しあてようとする文学であった。そして、それはあくまで「感じのよい」「気持のよい」ものであり、心を震い動かす種類のもの、運命的邂逅などのもつ相手の心をとらえてにっちもさっちもならぬような事態に至らすものでは決してなかった。それは、対象の人間に whole-hearted に没入した、密着した人間関係をよしとする傾向の強い日本的といえるものではない。あくまで対象との間に距離をおいて、そこに理性の働きを十全に認めようとすることに終始する文学、「親密は知覚をにぶらせ、知性は精神と対象物との間に不十分な間隔があれば力を失う」「……intimacy blurs perception: intelligence fails if there is insufficient distance between mind and object)²⁾ ということを示す文学、これをより一般的にいえば、理性と感情のバランスを標榜する文学……それがオースティンの文学であった。オースティンの文学の merit も demerit もこの本質の中に見い出さなければならない。

1) Dorothy Van Ghent が “emotionally informed intelligence” ということばを使っているが (On *Pride and Prejudice*) , それは多分私が *sentiment* というので表わそうとするものを言っているものだろう。とするところの “emotionally informed intelligence” (感情的に鼓吹された知性) というのも巧みな表現である。

2) *Twentieth Century Interpretations of Pride and Prejudice*, p.98.